

相談ネットワーク通信

2024. 8. 5 (月)

子育て・教育なんでも相談ネットワーク

No.128

700-0822 岡山市北区表町1-4-64 上之町ビル3F

TEL・FAX 086-226-0110 Eメール: soudan-net@vivid.ocn.ne.jp

ホームページアドレス <http://www.soudan-net.sakura.ne.jp>

夕焼けあれこれ(3)

相談員

山本

和弘

当ネットワークの設立に尽力された故内田喬さんは、私にとつては高校の恩師で、2年間国語を教わりました。同時に「文芸部」の顧問でもあり、勧められて俳句(もどき)を作ったこともありました。

母さん今帰ったよ秋の暮

微妙な字足らずです。上五「おかあさん」なら、字数が揃いますが、句としてはいただけません。「母さん今帰ったよ」というフレーズがまず浮かんで、できた句です。何気なく口からこぼれた日常の言葉のように、気負わず巧まず自然に詠んだような味が、気に入っています。秋の日は釣瓶落とし、部活を終えて帰宅していると、とつぷり日が暮れて、田舎道はすつ

かり暗くなります。冷え冷えと寂しい暗がりの道を、自転車をこぎ続け、自宅の灯りを見て、ほっと気持ちがあくつる瞬間があります。当時午後七時から放映されていた「巨人の星」も、見逃すことがしばしばでした。夕食の後は、現在とは違って少ないとはいえ、宿題もあり、その日の自分に課した学習のノルマもある。そんな日常の一コマです。

文芸部の冊子に、これを掲載したものがクラスに配布してあったのを、何かの折に目にした教師の一人が、「最近の俳句ってこんなのをつくるのか？」と驚き半分、あざ

内心、赤面しつつ、自分なりの抗弁もないわけではありませんでした。
夕焼けはほんとに真っ赤に燃えるんだな
この句も、同じ冊子に載せて

けり半分で感想を漏らされました。



いました。さっきの批評は、これに対してのものだったかもしれませぬ。

内田先生は、これを褒めて取り上げてくださいましたが、実は褒められるほど純真な、無心な作品ではありませんでした。自然なつぶやきを意識し、無邪気さを装いすぎて、少々鼻につく臭さがあるかも知れませぬ。

ところで、これらの句と重なって、なぜか思い出される情景があります。

高校生の頃、学校行事で集団鑑賞した映画「橋のない川 第一部」(今井正監督)の一シーンに、たしかこんな場面がありました。

北林谷栄演じる老婆、畑中ぬいが、地主の元に小作米を納めての帰り道、空になった大八車(荷車)に乗るよう嫁のふでに勧められ、寛いで後ろ向きに腰を下ろした彼女の目に、みごとに夕焼けで西の空が真っ赤に染まっているのが見えます。

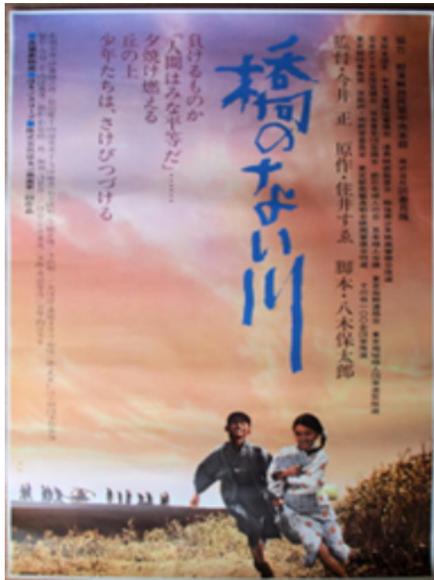
「見てみい。おふで。あの向こうが西方浄土ゆうてなあ、お釈迦はんが住んでるところやで。あそこには、差別も貧乏もないのやで。この世で、どんなに辛くても、辛抱して、お釈迦はんにおすがりしとつたら、あそこへ行けるんやで。」というようなことを、しみじみ語る場面。まことにあやふやなうろ覚えで、正確なところは確かめるとまがありません

が、私の記憶の中では、印象的な場面なのです。

映画「橋のない川」(第一部)は、モノクロ映像がずっと続きます。ですからこの「西方浄土」を眺めやる場面も、実際はモノクロ映像だったのでしようが、私の脳裏には鮮やかな紅い夕焼けの映像が刻まれています。

ところで、この映画、ラストシーンの一瞬、カラーに変わります。(「パートカラー」と呼ばれるそうです)。小森の村の人達が歩いているシルエットを包んで夕日が空一面を真っ赤に染める、鮮烈な映像でした。

空腹の弟のために豆を炊こうとした小学一年生の永井武は、失火により村を焼く火事を起こします。在所の消防団は、「小森」が被差別部落であるゆえに、消火しようとせず、火事を放



置します。失火をとがめられた武は、その夜自殺してしまうのでした。武の父藤作は、武の死体を抱きながら、この村にも消防ポンプをかうと決心し、娘を遊郭に売った金を、消防ポンプの購入に充てます。村対抗の提灯落し競争で、その新しい消防ポンプにより「小森」が優勝しますが、それを承認したくない他地区の連中により、優勝旗を焼かれてしまいます。

堪え難い憤懣を抑えながら、村に向かつて歩む小森の人々を夕焼けが包むなか、画面には、1927年(大正十一年)三月三日、全国水平社が結成された旨、テロップが流れます。

「水平社は、かくして生れた。人の世に熱あれ、人間に光あれ。」

ラストシーンが一瞬カラーになるほかにシリアスなこの映画に、私は、思いの外「暗い」印象は持ちませんでした。ほとぼるするヒューマニズムと、繊細・鋭敏な感性が、作品の隅々にみなぎっているせいでしようか?この映画作品に強く打たれて(日記にそんなことを書いています)、以後、私は、原作作品を続けて読みました。

当時、作品は雑誌「部落」に連載中で、一部分が刊行されていただけでしたが、続編が新たに出版される度に、学

校帰りに立ち寄る書店で買い求め、読みました。いわゆる「受験生」であった頃に、その自覚を放棄したかのよう、何度も繰り返し読んで読んだ本の一つです。思い入れもひとしおのものがあります。

今、私の手元に一枚のポスターがあります。

大学に入学したばかりの頃、サークルの先輩で専攻も同じ女学生Kさんの、飾り気のない室の壁に、このポスターが貼ってありました。卒業される時、それを無理にせがんで「形見分け」として戴いたような記憶があるのですが、今では実物は見あたりません。

Kさんは、卒業後上京して政党機関紙「赤旗」の編集部で「就職」。主に文化・芸能の分野で活躍されました。紙面に署名入りの記事が掲載されるたびに、懐かしく励まされたものでした。退職後の今も、「ジャーナリスト」の肩書きで、映画評などを執筆されています。

ところで、今、私の手元にあるポスターは、彼女の部屋にあったものではなく、最近(10年ほど前)あるいきさつで入手したものです。(つづく)

やまもと かずひろ

2024年度すべての子どもたちにゆきとどいた教育を求める署名

全国教育署名のお願い

今年も「ゆきとどいた教育をもとめる岡山県民の会」から、協力依頼がありました。趣旨に賛同し、取り組みに協力します。会員様におかれましても、ご理解とご協力をお願いいたします。

署名の請願・陳情先も、衆・参議院議長あて、岡山県議会議長あて、岡山市議会議長あてになっていますので、それぞれにご協力ください。

※ 署名欄がすべて埋まらなくてもかまいません。

※ 署名の送付先

700-0822

岡山市北区表町一丁目4-64 上之町ビル3F

子育て・教育なんでも相談ネットワーク

※ 岡山市の陳情締め切りが早くなっていますので、10月末くらいまでに届けてください。

8月2日(金)にゆきとどいた教育をもとめる岡山県民の会主催で、「どうする学校 どうなる先生2024年度のスタート集会」が開かれました。願いを、一筆一筆の署名に積みあげ、議会に声を届けましょう。

相談ネットワークの

これまで と これから

23年度の反省と24年度への課題

これまで

相談状況

別表(6ページ)のように

なっています。子どもの相談件数は減少傾向が続いています。学校の相談体制を含めて、公的相談機関の対応が一定進んできていることの反映とされます。

一方、昨年十月発表された文部科学省の調査では、不登校の状態にある小中学生は、約29万九千人となり、10年連続で増加して過去最多となり、高校生も同様に不登校の増加傾向が続いています。いじめの認知件数や暴力行為も過去最多となるなど事態は深刻です。気軽に相談できる窓口の必要性は増しており、当ネットワークの周知広報の工夫が求められます。

会員・賛助団体など、従前からのつながりのほか、インターネット検索を通じて当ネットワークを知ったというケースも複数ありました。

23年7月から24年6月

不登校の相談をきっかけに継続的に学習支援を行う中で、高校進学目標をかなえ、進学後も生活のアドバイスを継続するなど一定の役割を果たすことができました。

相談員の状況

小・中・高・障害児学校の退職

教職員がボランティアで相談活動に臨んでいます。

研修会

色々な問題に即応できるよう日常的な

共同研究と研修を心がけています。相談員の力量を高めるために、月に一度を目安に研修会を継続しています。近年では、「子どもの権利条約・権利条約」「不登校を考える」などのテーマで研修を続けてきています。

会報の発行

年間五回発行しました。

いろいろな方に原稿を寄せていただきました。発達障害やいじめなど、様々な教育課題

や会員さんの要求に答えられるように工夫しました。

講師活動

各種の学習会での講師や、団体機関紙・会報などへの教育相談関連記事執筆の要請に積極的に応え、対応してきました。

ホームページ・ブログ

した。

会報読者以外の皆さんにも、相談ネットの取り組みについて広くお知らせできるようにホームページとブログを随

他団体との交流

時更新しています。

おかやま教育文化センターの諸活動に構成団体として参加しました。賛助会員の団体とも連携した取り組みをしました。

会費と会員

長く支えて

くださった会員さんが高齢で退会されたり、賛助団体からの会費減額の申し出など、厳しい財政状況が続いています。変わらぬご支援に感謝し

これから

24年7月から25年6月

二〇二四年度 活動の方針と計画

相談活動

ます。

不登校、いじめ、暴力行為などの深刻化を報告した文部科学省は「コロナ禍での生活環境の変化や制限による交友関係の築きにくさなどが背景にある」と指摘しました。子どもたちも大人も多くのストレスをためています。悩みも複雑になり、不登校や成人の引きこもりの問題も依然として深刻です。しっかりと受け止めて相談活動に取り組みます。学習支援や居場所づくりに貢献したいです。電話、来訪による対面相談の外、メールでの相談にもお応えします。

相談員の状況

相談員の拡充につとめ、特に若手の相談員の確保をめざします。高齢の相談員も、健康に気を付けて、経験を生かして相談活動を続けたいと思います。

研修会

「子どもの権利」、「不登校問題」など、多方面から課題克服の方向を探る研修が続いています。引き続き、複雑化・深刻化しつつある悩みや課題へ

の対応をめざして、新たな研修課題を設定しながら

ら研修活動を進めていきます。相談員に限らず、だれでも参加できます。日時の確認は電話でお願いします。

講師活動

コロナ五類移行後も新たな流行が指摘されていますが、集まって学んだり話したりする機会はやはり貴重だとの感想をよくお聞きします。要請があれば、少人数グループでも、出かけていきます。お気軽にご連絡ください

会報の発行

会報は、年間五回を目標に発行します。子育て・教育の悩みや希望をつづり、紙面の充実に努めます。日頃の思いや、ちょっとした近況など、会員さんからの投稿や感想をお待ちしています。

ホームページ・ブログ

ホームページは、相談ネットワークの全体像やこれまでの活動を、広くお知らせできればと、願いながら更新しています。



上のQRコードからホームページにアクセスできます。ネットワーク通信のバックナンバーや、過去の出版物、新聞掲載記事のダイジェスト版なども掲載しています。周りの皆さんにも是非ご紹介下さい。



また、こちらのQRコードからブログへも越し下さい。ネットワークの日々の動き、催しのご案内、相談員のつぶやきなど、思いつくまます記事をしています。コメントの投稿も歓迎です。

他団体との交流

賛助会員になつていただいている諸団体や「おかやま教育文化センター」と一層の連携・交流を深めていきます。ネットワークの結びつきを大切にし、更に強め、広げる努力をします。

会費と会員

現役の子育て世代への呼びかけを重視して、相談ネットワークの取り組みを広げます。厳しい財政事情の中ですが、引き続き会費納入にご協力下さい

2024年度 相談担当

月	田中	秋山	大谷
火	衣笠 (午前)	田中	(午前)
水	山本	中山	花田 加戸 (午後)
木	正保	秋山	福田 (午後)
金	難波	小椋	福田 (午後) 「ストレスをやわらげる会」(14時～15時)

相談時間 月～金10:00～16:00

- ・この時間以外でも相談に応じることは可能です
- ・相談は、電話・面談どちらでもできます

なお、面談や時間外を希望される方は、事前にお知らせください

「会費」の季節です

いつもネットワークの活動を支えていただいております。心からお礼申します。納入は同封の振込用紙でお願いします。振込用紙の余白に会員さんの近況など書いていただくと嬉しいです。よろしくお願いします。

個人会費
賛助会員
口座番号
加入者

一口 2,000円以上
一口 5,000円以上
01200-9-10898
相談ネットワーク

核兵器廃絶へ

なんとすばらしい人間の、にんげんとしたの「ウイーン宣言」。「核兵器禁止条約第一回締約国会議で採択された文。この宣言にいたるまでのしんぼう強く声を上げた人たちを思い、人類は愚かではない、と改めて思った。恐ろしい核兵器に、いっぱい税金をつぎ込むより、もつと他に使うことがあるでしょう——と核保有国にいたい。その傘の下に入るなんて「自滅」の道ではありませんか。「一部の核兵器保有国が抑止力を擁護し……とは私たちの国。恥ずかしい。「決して手を出さな言葉を使おうよ」と呼びかける、政府を持つていたら、どんなにこの国を誇りに思うだろう。

最近、伊藤千尋氏の著書「非戦の誓い」、副題「憲法九条の碑」を読んだ。現在の為政者とは真逆の「平和大好き」にんげん達の「志」に感動した。

核兵器のない、戦争のない安心して暮らせる地球になるために——小さい声を上げつづけたい。

小さな運動を重ねる

車で10分足らずの「スポーツクラブ」に通いだして13年が過ぎた。

きょうかけは、突然のヒザ痛。治療も効果なし。杖をつけて集会に参加している私を見て、友人のE子さんが声をかけてくれた。「スポーツクラブで、プールの中を歩いて、ヒザ痛がなおつてひとがいるよ」で。

さうそく入会して、プールの中を歩いたが、首までの深さの水圧はこたえた。2階にある運動器具や、広いレッスン場を見学した。毎日の「レッスンスケジュール表」をみて、自分のできる運動に参加。2年前までは「太極拳」にも参加していた。

徐々に「ヒザ痛」が消え、通院もやめた。定休日以外は、毎日がんばって通つて自分都合で参加した。コーチが「最初、手すりにつかまってヨタヨタ2階が上がってきたね。毎日コツコツが大切だね」と声をかけてくれる。「がんばって、毎日、かよっているからね。こは私の恩人だよ」と答えている。

坪井あき子 詩文集
「コロナ禍」の日々 より

倉敷市議会、図書館の直営での 運営を求める請願を採択

相談員 正保 宏文

2021年6月から私は倉敷市の「わたしたちの図書館の未来を考える会」の代表を務めている。代表を受けて以来、図書館の運営は民間委託ではなく、直営で行くべきだ、そして、図書館司書は正規採用とすべきだとずっと考えてきた。

残念なことに倉敷市では、20年余り図書館司書の正規採用が見送られてきた。そのために会計年度での採用が繰り返され、身分が不安定なまま放置されてきた。これではなかなか地に足の着いた仕事ができにくい。優れた司書は、「今年は、この本はいらないかもしれないが、5年先、10年先には必要となってくる。そんなことを考えながら本を購入する」という。まさに専門家として、倉敷市民になりかわって、将来市民が必要となるであろうという本を選んでいくというのだ。ところが、根なし草のよ

うな会計年度採用の司書や民間委託で採用された不安定雇用の司書に、正規採用の司書と同レベルの仕事を求めることができるであろうか。なかなか厳しいように思う。

倉敷市には、様々な歴史的な文化や伝統、遺産がある。それらのものを永く伝達・継承していくことは、図書館の果たすべき役割の一つである。図書館が市民にとって知的情報の宝庫であるためには、倉敷市を愛し、いろいろな本を愛し、市民とともに成長を願う図書館司書の存在が不可欠だと思う。使い捨てのような身分の司書を置くべきではない。

ところで、私たちの「考える会」は、倉敷市の6月議会に「倉敷市立図書館の直営での運営を求める請願書」を提出した。私たちのこれまでの6300筆を超える署名や「図書館と市民の会・くらしき」のみなさんの運動が原動力と

なつて、5つの党派の方々が紹介議員となってくれた。その結果、文教委員会では直営に賛成の側が4対2で民間委託側を破った。さらに6月28日の本議会での採決では、22対19の僅差で直営に賛成の側が勝利した。これも倉敷市民のみなさん、県下の司書のみなさんのご支援・ご協力のたまものである。感謝の気持ちでいっぱいである。今回の採決は、私たちにとって大変うれしいことであるが、山を一つ越えたに過ぎない。市民による市民のための未来を見据えた図書館をつくるために、引き続き多くの人たちとスクラムを組んでよりよい図書館を創造していくために頑張りたい。

しょうほ ひろふみ



夏休みは短い方がいい？

相談員

秋山 正美

NPO法人キッズドアのアンケート調査によると困窮世帯の保護者の47%が「今より短い方がいい」13%が「なくてよい」と回答した。理由は、夏休み中食費や電気がつらく、旅行に行かせるだけの経済的な余裕もないためだと。

子どもにとっては学校から一時的に解放される夏休みは、楽しいものだ、勝手に思い込んでいたわらだった。学校に勤めていたころは、夏休みが来るとほっとしたものだ。研修も多かったが「自宅研修」の権利もあったので有効に使った。そういえば、わが家の子どもたちは夏休みに、両親が仕事に行っている時どう過ごしていたんだろう。キッズドアのこのニュースを目にして、夏休みって何だろうと改めて考えてみた。

夏は暑くて机についての勉強なんてできないから、そのほかのことでいろいろ体験や経験をする機会かなど。単純に考えていた。

夏休みという制度は、ヨーロッパやアメリカなどで、元々は農業社会のニーズから生まれたそう。つまり農作業が忙しい時期に子どもたちが家族の手伝いをするために学校が休みになったということ。当時は、教育よりも家庭の経済的ニーズが優先されたのだが、実はこの休暇が教育的にも心理的にも子どもたちにとって有益だと評価されるようになり、現代にまで続いている。

決まった時間割の中で同じ内容の学習を強制される日常から解放されることは、精神的なリフレッシュの機会をもつことになる。また、自由

に使える時間を持つことができる休みは、単なる休息期間を超えた役割がある。学びの場を学校の外に広げて、新しい経験や体験を積むことで、自分の好きなことを見つけたらいいと思う。今まで知らなかったことに出会えてワクワクする。例えばよくないかもしれないが、食べることの新しいものを初めて食べて、「こんなおいしいものがある世界にあったのか」と思うことと同じかもしれない。ただ、たくさんさんの経験や体験をすればよいということではない。まずは、リフレッシュ、そして自由な時間を自分で決めて使うということだ。

「夏休みって何のためにあるのかな」と家族で話し、「夏休みがあつてよかった」と思えることが一つでもできたらいいですね。

子ども時代、教員時代の初期、夏休みの宿題と言えば「夏休みのとも」だった。最近では「夏ドリル」とか「夏にチャレンジ」とかいろいろ名前を変えているが、一学期の復

習用の学習帳だ。「夏休みのとも」は、小学校の先生たちが、どのように夏休みを過ごしてほしいか考えて編集されたもので、夏休みならではの体験や経験ができるように随所に工夫があった。夏休みって何かと考えた時、「夏休みのとも」が浮かんできた。教室にクーラーが入ったから、夏休みは短くてして授業時間を確保したい教育委員会もあるが、夏休みが子どもたちにとってどんな有益な時間か考えてもらいたいし、生活費がかかるから「夏休みは短い方がいい」という声にも、答えるようであつてほしい。そこ

あきやま まさみ

キードは「自由な時間」。

